

第32回 市長と話そう会

・日時 令和6年2月15日(木)
18:30~19:30

・場所 市役所3階会議室

・出席者 武雄商工会青年部
会長 松田 様 他14名



市民の皆様と市長が直接語り合う「市長と話そう会」第32回目は商工会青年部の皆さんと「今後の武雄市」というテーマで意見交換を行い、子育て支援、地域イベント、治水事業等について意見を交わしました。以下抜粋して掲載しております。

(参加者)

・教育文化にも力を入れられるとのことで、自分たちの小さい頃と比較しても小学校の生徒数が少なくなるなどしているが、特に教育文化については子どもがいてこそそのものだとも思うので、少子化について根本的に子どもの数をどう増やしていくのか、市長はどのように考えられているのか教えてほしい。

(市長)

・大事にしたいのは増やす以前に、生まれてきた子どもを社会全体で大事に育てていくことだと考えている。
・実際の現場においては不登校児童や特別支援教育を受ける生徒がここ数年だけを見ても増加している傾向にある。これまでの教育よりさらに個々に寄り添った教育が必要であり、どんな境遇であってもすべての子どもが自分の可能性というものを自認できるように社会全体で取り組んでいきたい。
・少子化対策については、自分の中でも根本的に何だろう改めて考えてみて、子どもを産みたいと思う人が生みたい人数産むことができるという環境を目指すことではないかと思う。
それを踏まえて、補助金含め様々な支援がある中でも、男性の育児参加がすごく大事な要素のひとつだと考えており、社会全体での子育てへの協力体制が、これなら産めるという意識につながっていくと考えており、これからはそちらにも力を入れていきたいと考えている。
・武雄には子育て支援センターがあり、最近は育休中のお父さんが子どもを連れて来ることが多くなったとのこと。そこで同じように子どもを連れてきているお父さん同士の交流があり、今度一緒にバンドでもやってみようなんて話にもなっているそう。

(参加者)

・PTAの活動で子育て支援センターに訪問することがあったが、特に市外から移住してきた方の利用者が多く、コミュニティ形成の場にもなっているとは聞いていた。そのような場の拡充などでも支援拡充にもなり、移住などを含めた少子化対策につながる。

(市長)

・医療費や病児保育などへの支援も武雄市では行っているが、全国的に子育て支援のサービス合戦的な傾向も見える中で、新しい支援など企業の皆さんとも力を合わせて一緒にやっていけたらと思う。

(参加者)

- ・今後の物産まつりについて、他地域と比較してももっと特色ある盛り上がるイベントになればと思うが、今後の開催についてどのように考えられているか。

(市長)

- ・現時点で今年度実施した物産まつりについての反省と来年に向けての議論が始まったとことであり、来年度どのようにするか検証に入っているところ。
新しい方向性についてもスポット的な実施も含めて考えていきたいので、ぜひ皆さんからのアイデアなどもあれば積極的に取り込んでいきたいと思うのでその際はよろしくお願いします。

(参加者)

- ・北方トロッコレースが以前は産業まつりの際に開催されていたが、地域イベントの復活などはされないのか。

(市長)

- ・自分も当時は引っ張る側でトロッコレースにも参加したりしていたが、どうしても地域に根差したイベントは先細りになったり無くなったりしつつある。このようなイベントにおいては地元の人がどれだけやれるかが重要な要素になっており、武内町では飛龍窯での灯ろうまつりが無くなったが、地域の人たちで火つむぎというイベントを自分たちの手で始められ、ピザを焼いたり、窯に火を入れたりなど2年目になるが続けられている。

どうしても行政主体ではなかなか長続きというのは難しく、自分たちの町をこうしていきたいという人が地域の振興や文化の継続には欠かせない。

トロッコレースについても同様に以前と同じ規模でなくとも地域の中でもこんな感じで復活したいというのがあればぜひ一緒にやっていきたいと思う。

(参加者)

- ・北方では地域での治水ワークショップに参加したりして、治水対策についても市の取り組みについて聞く機会が多くあるが、不安が拭えない部分もまだある中で、複数の農地を大規模な遊水地にして治水に活用するなどはどうかという意見もあったりするがどうか。

(市長)

- ・北方の治水におけるこれからの戦略については、貯めるところをたくさん作り、いかに低平地に水が溜まらないようにすることだと思っている。

町なかでの空き地を活用した貯留施設から農地を活用した遊水地についてもシミュレーション含め国県と一緒に検討をしている。特に北方においては良好な住環境をいう可能性が大いにある地域なので、より安心して住めるというのを目指していきたいと考えている。